「家族」をめぐる読書会　第５回

　第４回はアメリカの小説だったので、舞台を日本へ移すことに。時代は１９８１～８４（昭和56～59）年。雑誌「群像」に掲載された黒井千次の連作小説「群棲」を取り上げる。（日本の）家族（家）とは何か、何だったのかを考えてみたい。著者や作品について簡単にまとめてみた。話し合いきっかけにしていただければ…。

●黒井千次
　１９３２年、東京・杉並生まれ。東京大学経済学部卒。サラリーマン（富士重工業）の傍ら小説の執筆を始める。５８年、『青い工場』でデビュー。「第三の新人」に続く「内向の世代」を代表する作家の一人。大企業の労働者の疎外感などを描いた作品を多数発表。自伝的な青春小説も執筆。日本文芸家協会理事長、日本芸術院長などを務めた。

●内向の世代（ウィキペディアほか）
　１９７１年に文芸評論家の小田切秀雄が初めて用いたとされる。小田切は「60年代における学生運動の退潮や倦怠、嫌悪感から政治的イデオロギーから距離をおきはじめた当時の作家や評論家」と否定的な意味で使った。主に自らの実存や在り方を内省的に模索したとされる。
　代表的な作家として、古井由吉、黒井千次、日野啓三、後藤明生、坂上弘、小川国夫、高井有一、阿部昭、柏原兵三などがあげられる。女性では、大庭みな子、富岡多恵子など。

「群棲」（１９８４年、講談社）
　１９８１～８４（昭和56～59）年。雑誌「群像」に掲載された全12章からなる作品である。谷崎潤一郎賞受賞。著者の最高傑作ともいわれている。単行本の帯には「現代都市生活者の人間関係、親子、夫婦などの奇妙な脆さを見事に表現する」とある。
　舞台は東京の郊外。「向こう三軒両隣」ならぬ路地をはさんで互いに「向こう二軒片隣」の関係にある四軒（プラス１軒？）のそれぞれの家族をめぐる日常を描く。暮らしの中で起こる出来事（嫁姑問題、高齢化とボケ、浮気など）を通して現代人の閉塞感、憂鬱、孤独などが浮き彫りにされていく。女性たちの夫や社会に対する鬱屈した感情が見てとれる。
　小説の冒頭、物語のはじめに囲みで、４軒の家の位置関係が示されている（図にしようとしたが、うまくいかなかった）。

４（＋１）軒の家族構成とその家族を描いている作品を整理してみる。
・織田家　房夫・紀代子。息子（耕一）と娘（真由）…「オモチャの部屋」「二階屋の隣人」「手紙の来た家」
・滝川家　尊彦・静子。子どもは成人して独立。夫は単身赴任…「道の向うの扉」「水泥棒」「訪問者」
・安永家　勇造・雅代。息子二人（勉・徹）、勇造の母義子…「夜の客」「水泥棒」「買い物する女達」「壁下の夕暮れ」
・木内家　昌樹・美知子。夫は失業しアルバイト…「窓の中」「芝の庭」
・田辺家　昔からの住人。家を新築し二階をアパートにする……「通行人」